

生き甲斐

フランコリウス アドロフ ミカエル

「私たちは、何のために生きているか」と

か「人生の意味は何か」とか言う質問は誰で

もき、と少なくとも一度聞いたことがあると

思います。私は今もよくその質問について考

えています。この質問の答えは、すぐに見つ

がるものではなく、人生の経験を通じて形作

られるものだと思います。これは、私が私の

生き甲斐を見つける旅の物語です。

子供のころの私は、あまり深く考えずにた

だ勉強したり遊んだりしていました。その時

は、明日の宿題のことだけ考えていました。

将来何になりたいかと聞かれると、ただ父と

同じ仕事をしたいと答えていました。親の言

うことにそのまま従、ていました。自分で考

えることはなく、ただ指示に従、ていただけ

でした。そのため、私は全然趣味がなくで勉

強しができませんでした。

気づかないうちに高校生にな、ていて、そ

のころはパイロットになりたが、たです。ところが、家族は私に軍隊で働いてほしが、たので、パイロットになる夢を諦めることにしました。代わりに、赤十字の活動に参加して、様々な傷の手当てや負傷者のケア、そして共感の大切さを学びました。赤十字での活動が楽しが、たので、インドネシア赤十字で働くことも考えましたが、そこで働くと家族を支えられなが、たため、それも諦めました。

高校卒業後、両親の希望で士官学校の入試を受けました。試験は順調だ、たものの、最終選考には残念ながら落ちてしまいました。両親の悲しみは今でも鮮明に覚えています。もう両親をあんなに悲しませたくなが、たので、来年もう一度挑戦することを決めました。これは、他人の関与なしに自分で下した初めての決断の一つでした。長い道のりの始まりを示す小さな一歩です。

一年後、同じことが起こりました。またしても最終選考に合格できませんでした。再び

両親を失望させてしま、たのです。二回の失敗で、人生の目的に迷い、もしがしたら自分は軍隊に向いていないのではないかと思うようになりました。そこで両親と話し合おうとしましたが、最初は受け入れませんでした。しかし、数ヶ月にわたる議論の末、ようやく両親を納得させることができました。幼いころから数学とコンピューターが好きだ、たので、ITの勉強をすることにしました。ついに大学で勉強を始めました。両親がまだ私の選択を完全には受け入れていないのは、と心配になることもありましたが、この分野に自分がふさわしいことを証明するためには一生懸命勉強しました。その間に赤十字社のメンバーとしての情熱を再発見する機会もありました。キャンパスで地元の赤十字機関との関係を築いたり、イベントで医療チームを管理したりしました。技術を導入して医療分野を改善することを試みることができると思いました。そうすれば、家族を支えられな

いことを心配する必要はなくなると思ひました。

今年から、私は日本に留学しています。ここでは情報処理を学ぶだけでなく、町の人々に聞き、彼らの問題を理解してどう手伝われるかを考えたいと思ひ、ています。そうすることで、自分の知識と経験を活かして人々の生活を向上させる手伝いをしていきたいです。まだ全部分からなひですが、今は私の存在の意味を見つけたまうに思ひ、ています。

これが、私の生き甲斐存なのです。